

新製品

CNCセンタレスグラインダー

静圧軸受搭載型を新開発

LSG-20 MSG-18

- CNC3軸・5軸制御
- オートローダー
- 自動ドレス・切込み



日本精機株式会社

本社工場 浜松市南区恩地町1555番地 TEL(053)425-3008 FAX(053)426-0439 〒430-0814
都田技術センター 浜松市北区新都田四丁目3-2 TEL・FAX(053)428-5228 〒431-2103
http://www.nihon-seiki.co.jp

LSG-20



BIG DAISHOWA

BIG-PLUS®

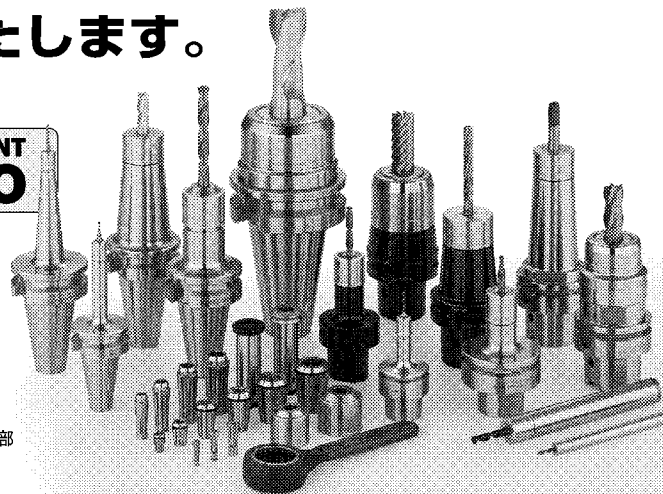
HSK

BIG COROMANT
CAPTO

大昭和精機株式会社

www.big-daishowa

本社/東大阪市西石切町3-3-39 TEL.072-982-2312 FAX.072-980-2231
工場/大阪工場、淡路第1・2・3・4・5工場
営業/東部・仙台・北関東・南関東・長野・中部・静岡・北陸・西部・岡山・広島・九州・海外営業本部
上海技術サービスセンター(中国)・BIG KAISER社(USA, Germany)



NC 旋盤、マシニングセンタ、
5 軸加工機、複合加工機・・・。
工作機械の進化と共に、
BIG は常に高精度ツーリングを
ご提案いたします。

日工会 60年の歩み

① 1950年代～70年代

日本工作機械工業会は日本の金属工作機械製造事業者を会員とする団体で、工作機械工業の総合的な発展を図るとともに関連工業の繁栄と国民経済の健全な発展に寄与することを目的に1951年に創立された。わが国の再起への道筋を切り開くため、基礎技術の研究や設備近代化に必要な支援を請うた努力を続け、次第に成長への基盤を整えていった。世界トップワンを獲得するまでの過程と、生産大国としての役割を果たすまでに発展した業界のこれまでの動きについて、日工会の活動とともに紹介する。

50年代

日工会は終戦後の混乱が色濃く残る51年、東日本工作機械協会と関西工作機械協会、それに中部工作機械協会の3団体が統合し、会員40社で旗揚げされた。東京・銀座で開かれた設立総会では、初代会長に佐野茂日立精機社長を選出、業界団体の誕生を祝うとともに復活に向けてのろしを上げた。

創立時に事務局長を務めた杉山一男元日工会副会長は、創立40周年を迎えた節目にその当時を回想し、日刊工業新聞92年6月25日付の紙面に以下の寄稿を寄せている。

「工作機械業界をもういちど全国団体に再編し、真に工作機械工業の復興と事業の安定を共同目標に、新たな覚悟をもって発足した。(中略)これで日工会は全国工作機械団体として、今度こそ末永く生き続けるものと確信し、この時点で何か混迷の過去を清算したような気持ちであった。日工会という支柱を得たことによって、枯死状態に陥っていた業界が奮起を誓い合ったという情景が伝わってくると思う。

日工会が創立した当時の国内の工作機械工業は、軍需という柱を失い生産台数が9139台、金額では約10億6600万円に低迷。54年には1万8120台、53億8500万円に増加したが、輸入が再開されたこともあって内需における輸入依存度が52%にも達し、国内需要の過半を侵食されるというのが実情だった。

53年に工作機械等試作3カ年計画がスタートした。戦時がもたらした開拓の空白期間は、国内技術を足跡みさせ輸入機との水準の違いを見せつけられていた。このため、3年間に2億8000万円の予算が計上され、28社・61機種が補助金交付の選定を受けて技術の国産化を促進した。また、57年には工作機械技術講習会を立ち上げ、全国で国産工作機械の優秀性をPRする活動を開した。

60年代

60年代に入った業界は、日本工作機械輸出振興会の設立と、日本国際工作機械見本市(JIMTOF)の開催を契機に、市場の拡大を国内外に求める動きを活発化させた。姉妹団体となる輸出振興会は、62年に社団法人として設立。初代理事長には日工会副会長の牧野常造牧野フライス製作所社長が兼務した。国内に限定されていた市場を欧米先進国にも広げようと組織化したもので、景気の後退局面ことに経営基盤が揺さぶられる業界体質を強化する狙いがあった。

輸出振興会では会長に、対し貿易業務や実務手続きなどを支援するともに、米・シカゴやドイツ・デュッセルドルフなどに拠点を開設。広報活動や市場調査、展示会の開催などを手掛けた。設立の翌年には旧ソ連・モスクワで展示会を開くなど、海外見本市の企画や参加なども手配し、国内メーカーの国際化に大きな役割を果たした。外貨を稼ぐため国を挙げて輸出の振興に力を入れた時期でも重なり、工作機械輸出は66年に初めて146億円と100億円を突破。輸出比率は19%になるなど国際市場での日本の存在感が増していくことになった。

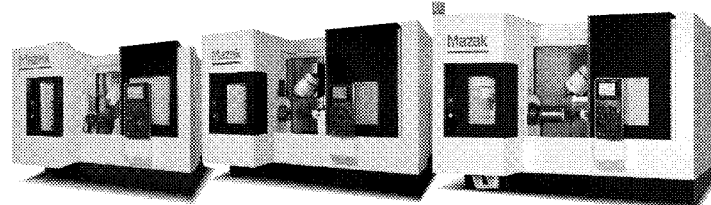
70年代

70年代は、日工会が社団法人化されるといふ組織として大きな事業がもたらされた。また、ドルショックとオイルショックという不況に直面した工作機械の生産は2度にわたって大きな後退に直面した。技術開発面では国内業界の急成長を決定づける数値制御(NC)技術が開発され、マシンの高度化が一気に進んだ。社団法人への改組は、78年5月25日に開かれた通常総会で決議され、7月1日に正式発足した。衣替えは、米国の貿易摩擦がくすぶり始めていたことを背景に、通産省(当時)の指導もあって輸出振興会と一体化する形で実現した。移行にあたっては、両団体が6月30日付でいったん解散し、両会に加盟するメンバーが社団法人としての新組織を構成した。

幹部人事では、行政指導の輸出規制に業界側の対応を整え、輸出振興会との一体化に力を入れた。富田環豊田日工会会長が新生・日工会の初代会長に就任。世界のひのき舞台への跳躍を目指す日工会の基盤が整えられることになった。

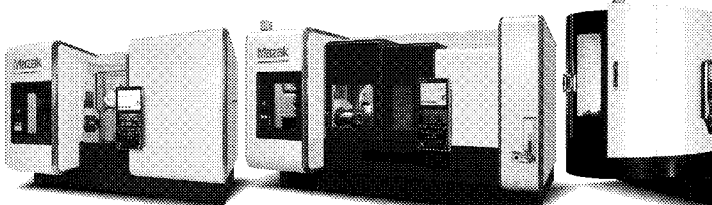
工作機械の生産額は65年の703億円から急激に70年まで5年間で4倍を超える3123億円にまで拡大した。しかし、71年のドルショックによって工作機械の国内需要は急激に落ち込んだ。同年の生産額は前年比15%減の2644億円に低迷。さらに、73年の第一次オイルショックによって不況期が再来し、75年の生産額は同36%減の2307億円にまで落ち込んだ。世界の工作機械産業に大きなインパクトをもたらしたのが国内メーカーによるNC化の動きだ。58年に国産第1号のNCフライス盤が開発されたのを皮切りに、66年の第3回JIMTOFで牧野フライス製作所(当時)から3台のNCフライス盤が初出品された。その後、NC化の動きは急加速し、70年の第5回JIMTOFでは123台のNC機が披露され、先端技術を競った。70年代に見舞われた不況を乗り越えた原動力はNC機の登場といえ、その後の国内業界の地位向上にも大きな影響を及ぼすことになった。

INTEGREX J,i,e series



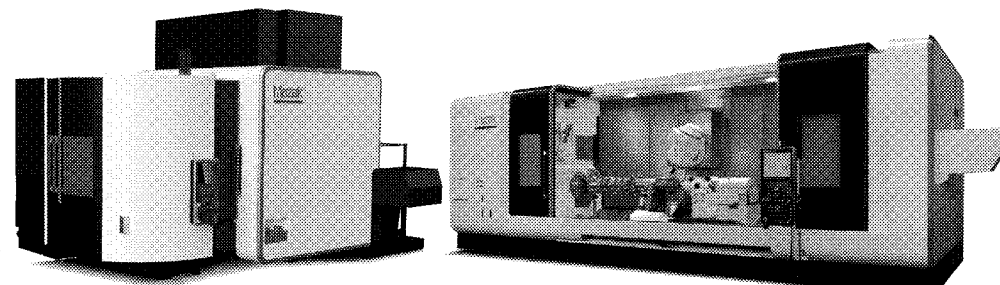
INTEGREX J series

INTEGREXが、より見近になった複合加工機



INTEGREX i series

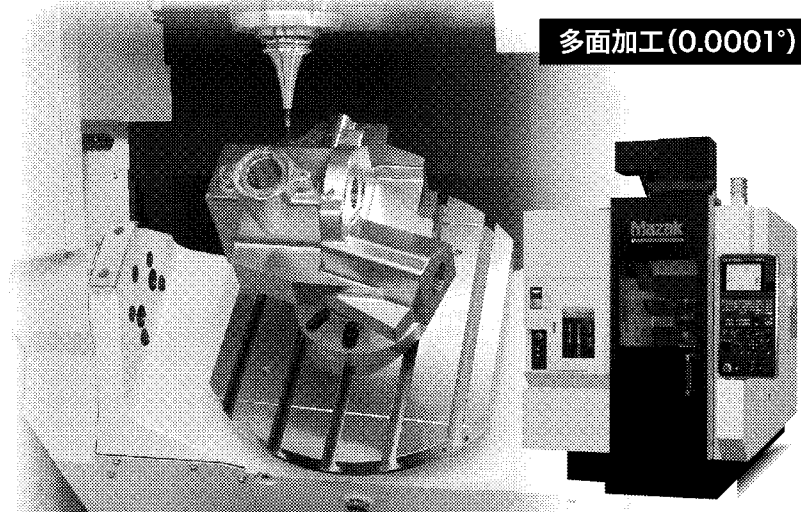
1チャッキング全加工、高機能複合加工機



INTEGREX e series

大物ワークを1チャッキング全加工、先進の大型複合加工機

圧倒的なラインナップでお客様のニーズにお応えします。



VARIAXIS J series

高精度多面加工立形マシニングセンタ



VARIAXIS i series

同時5軸加工立形マシニングセンタ

VARIAXIS J,i series

ヤマザキマザック株式会社

愛知県丹羽郡大口町竹田 1-131

0587-95-1131 (代表)

www.mazak.com

Your Partner for Innovation

Mazak